

看護系大学4年生と臨床看護師の看護実践能力修得に関する認識調査

キーワード：看護実践能力、看護学生、看護師、認識

○高山拓海¹⁾、金子史代²⁾
長岡赤十字病院¹⁾ 新潟青陵大学²⁾

I 目的

近年、医療の高度化・専門化に加えて、国民の健康意識の高まりや患者・家族の医療に対する意識の変化から、病院では新人看護師の資質の向上につながる教育が必要とされている。厚生労働省の新人看護職員研修ガイドラインでは、求める看護実践能力を基本姿勢と態度、技術的側面、管理的側面の要素から示している。私はこれに示される新人看護師の看護実践能力に関する研修の内容は、看護基礎教育課程で学ぶ看護学生が実践能力を高めていくための学習の方向性とも関係するものと考えた。そこで、看護実践能力修得に関する認識調査を看護系大学4年生と臨床看護師に行い、看護学生が看護実践能力を高めるための学習の内容と方向性を検討した。

II 方法

1. 調査方法：A県看護系大学4年生80名と総合病院で働く経験1年以上の看護師90名に自記式のアンケート調査を行った。調査項目は厚生労働省のガイドライン¹⁾から選んだ看護実践能力に関係する基本姿勢と態度、技術的側面、管理的側面、そして対象者の背景の計35項目である。2. 調査期間：2014年5-6月。3. 分析方法：調査項目の卒業時までに「できる」と「指導の下でできる」の回答を集計し、看護実践能力修得に関する学生と看護師の認識を分析した。4. 倫理的配慮：対象者に研究の目的、方法、調査用紙は無記名で個人は特定されないこと等を文書で説明し、アンケートの提出をもって研究協力の承諾を得たものとした。

III 結果

看護学生71名(回収率88.75%)、看護師88名(回収率97.78%)からアンケートを回収した。各側面の項目平均の回答率は、卒業時までに「できる」では、基本姿勢と態度の側面は学生51.17%・看護師33.3%、技術的側面は学生40.9%・看護師29.7%、管理的側面は学生59.3%、看護師47.7%であった。

卒業時までに「指導の下でできる」では、基本姿勢と態度の側面は学生48.9%・看護師66.6%、技術的側面は学生59.1%・看護師70.1%、管理的側面は40.7%・看護師52.3%であった。卒業時までに「できる」の回答率は学生が高く、卒業時までに「指導の下でできる」の回答率は看護師が高かった。

看護実践能力の各側面においては、卒業時までに「できる」の回答率が最も高い項目は、基本姿勢と態度の側面では学生88.7%・看護師51.1%で「看護師の責任を認識できる」、技術的側面では学生88.7%・看護師61.4%で「部分浴・陰部ケア・オムツ交換」、管理的側面では、学生91.5%・看護師75.0%で「プライバシーを保護して記録物を取り扱う」であり、学生と看護師で同じ項目が高い傾向にあった。

IV 考察

看護実践能力における基本的態度「看護師の責任を認識できる」では卒業時までに「できる」の回答は看護学生が約9割に対し看護師は約5割であり、これは「責任」に対する認識の相違により差が出たと推察される。一方、技術的側面は「指導の下でできる」が両者ともに多く、技術には日常生活援助の技術以外にも身体侵襲を伴う技術があり、指導なくしては修得できないことを認識していたと思われる。指導により学生は自分の技術上の課題を自覚でき、看護師としての責任の重さを実感して高い技術修得につながると考える。

V 結論

看護実践能力において、学生は「できる」の回答率が高く、看護師は「指導の下でできる」の回答率が高かった。この認識の差を縮めるために基礎教育課程で学ぶ看護学生は自分に何が不足しているのか考え、目的意識を持ちながら指導者のもとで学び続ける姿勢が大切であることが示唆された。引用文献 1)厚生労働省・新人看護職員研修ガイドライン、2010。